

法華經の虚空について

望 月 海 淑

羅什訳妙法華經に於て、虚空の訳語は *akāsa* と *antarikṣa* の二つの言葉に就いて用いられたものであることは既に指摘したところである。^①そして、これら虚空の語を直接的説法場面の設定として使用したのは、十一章見宝塔品と十三章従地涌出品とにとゞめられる。見宝塔品に於ては *antarikṣa* の中に多宝塔が涌出し、定住し、説法がなされ、涌出品に於ては地下の *akāsa* の中に定住せる地涌の菩薩等が涌出し、多宝塔の周りに集り、その場面のすべてを *akāsa* の世界に置換えて説法がなされている。妙法華經はこの両者を通じて虚空の訳語を使用したのであるが、正法華經は *antarikṣa* を虚空、*akāsa* を摂護土界と訳出している。そして、この小論は法華經の原始分たる第一期第二期成立の各章に於いて、虚空と訳出された語と、その使用された意味を考察して行きたいと考えるものである。

二

妙法華經に於て虚空の訳語は次の各章に於て使用されている。

即ち、譬喩品・藥草喩品・授記品・化城喩品・五百弟子授記品・見宝塔品・安樂行品・従地涌出品・分別功德品・

常不輕菩薩品・如来神力品である。そして以上の中、梵文法華經に於ける *antariksa* の語の訳語として使用されたものは、譬喩品・授記品・見宝塔品・安樂行品・從地涌出品・分別功德品・常不輕菩薩品・如来神力品であり、*akṣaya* の訳語として使用されているのは、藥草喩品・化城喩品・五百弟子授記品・見宝塔品・安樂行品・從地涌出品・分別功德品である。そこで、便宜上此れ等各章に於ける表現箇所を現存經典から摘出し、考察して行くことにする。

三

antariksa 使用の場合

a 譬喩品

(妙) 所散天衣住^二虚空中^一。而自廻轉。諸天伎樂百千萬種。於^二虚空中^一一時俱作。雨^二衆天華^一。②

(正) 以天華香意華大意華散于仏土。諸天衣物悉在虚空羅列而住。天上伎樂自然而鳴。天上大声自然雷震普雨天華。③

(梵) *divyāni ca vastrāṇy upary antarikṣe bhṛāmayanti sma* — *divyāni ca tūrya — śata — sahasraṇi dundubhayaś cōpary antarikṣe parāhananti sma* — *mahantam ca puṣpa — varṣam abhipravarṣayit* — *vāṭvam ca vācam bhāṣante sma* — ④

これは、耆闍崛山に於て舍利弗が未來世に作仏し華光如来の記莢を与えられたことに關し、天に住む弟子等が身に着せる衣服を脱いで仏に供養した処の記述であって、三經典共に同一の内容が語られており、正・妙兩經共に虚空の訳語が使用されておるが、正法華經のみ *antariksa* の訳を一度省略しているが、これは同一の訳語を二度重ねることの煩鎖を避けたためと思われる。

b 授記品

(妙) 其仏常処ニ虚空ニ為レ衆説レ法。(21 a)

(正) 則坐虚空。為一切人講説経法。(87 b)

(梵) sa ca bhagavan vaihāyasam antarikṣe sthitaḥ dhikṣṇam dharmam deśayisyati (134~135)
須菩提が未来世に於て名相如来とならんとせる記述の処であつて、梵文法華經が antarikṣa をもつて語つてゐる如く、空中に於てその仏は住し法を説くとしたものである

c 見宝塔品

この章に於ては五ヶ所に於て antarikṣa が見られるが、その中主なものは、

(妙) 爾時仏前有ニ七宝塔^一。高五百由旬。縦広二百五十由旬。從^レ地涌出住^ニ在空中^一。(32 b)

(正) 爾時仏前。七宝之塔從地涌出。二万里適現繞仏。起在虚空自然而立。(102 b)

(梵) atha khalu bhagavataḥ purastat tataḥ pṛthivī—pradeśāt paśan—madhyāt sapta—ratna—mayāḥ stūpo 'bhyudgataḥ pañca—yojana—śatāny uccaiatvena tad—anurūpeṇa ca pariṇāhena | abhyudgāmya vaihāyasam antarikṣe samavāṣṭhac…… (29 a)

(妙) 見^ニ所分身^一仏悉已来集。各各坐^ニ獅子之座^一。皆聞^レ諸仏与欲^ニ同開^ニ宝塔^一。即從^レ座住^ニ虚空^一中^一。(33 b)

(正) 見諸所化各各坐師子之座。及諸侍者皆来集会。齊華供養。即從座起住於虚空。(103 c)

(梵) svakād dharmi āsanād utthāya vaihāyasam antarikṣe tiṣṭhat (213)

(妙) 各作^ニ是念^一。仏座高遠。唯願如来以^ニ神通力^一。令^ニ我等輩俱處^ニ虚空^一。即時釈迦牟尼仏。以^ニ神通力^一接^ニ諸大衆^一皆在^ニ虚空^一。(33 c)

(正) 心念言。諸仏至真道德高遠而不可逮。巍々難量不可稱限。唯願如來。垂意見念加。威神恩。令我等輩俱處虛空。
仏知所念現神足力。使四部衆自然超上處於虛空(104c)

(梵) *dūra—sthā vāyam abhyāṃ tathāgatābhyaṃ | yan munāṃ vāyam api tathāgatānubhāvena
vāhāyasam abhyndgacchemā iti | atha khalu bhagavāṃ śākyamunis tathāgatas tāsāṃ catasṛṇāṃ
parśadāṃ cetasāiva catāḥ | parivitarāṃ eṅāyā tasyāṃ velāyāṃ rddhi—balena tās catasraḥ
parśado vāhāyasam upary antarikṣa pratiṣṭhāpayati sma (s115)*

この章の説示は、七宝塔が地より涌出して空中に住し、釈迦牟尼は七宝塔の住処に昇り多宝如來と並座し、次で四衆の乞に応じて四衆をも空中に住せしめたものである。しかして、妙・正兩法華經共に *antarikṣa* を虚空と訳出しているのであるが——中二ヶ所妙法華經は空中と訳出——虚空は元來 *ākāśa* の訳語として使用されておるものであって、本来の虚空の意味とは異っているものであって空中の意が一番適切であるといいうる。正法華經は各章を通じて *antarikṣa* を虚空と訳出している。

d 安樂行品

(妙) 虚空諸天為_レ聽_レ法故 (38c)

(正) 虚空神明無数天子聽所説經 (109b)

(梵) *antarikṣāvacarāś cāya devatāḥ (s49)*

如來の滅後に四安樂行の第四の行を成就せる者には、種々な信者や、空中を遊行せる諸天は法を聴くために隨侍せりの文章の中で右の引用文は示されている。従つて妙正兩經の虚空の語は諸天を形容する語であつて、本来諸天の住む

べき場処であり空中であるとなしうる。

e 從地涌出品

(妙) 是諸菩薩從_レ地出已。各詣_二虚空七宝妙塔多宝如来_一 釈迦牟尼所_一 (40 a)

(正) 從地涌出。或從上下。或四方來。至忍世界悉住空中。見于滅度多宝世尊能仁大聖。 (1104)

(梵) to cōmajjōnmajjā yena sa mahā—ratna—stūpo vaihāyasam antarikṣe sthito…… (2522)

f 分別功德品

(妙) 於_二虚空中_一、雨_二曼陀羅華……_一 (44 a)

(正) 応時虚空雨天華。意華…… (115 c)

(梵) evōpari vaihāyasād antarikṣām māndārava—mahā—māndāraṇāṃ…… (280)

(妙) 於_二虚空中_一天鼓自鳴…… (44 b)

(正) 從虚空墮。虚空之中発大雷音 (115 c)

(梵) divyani ca candanāgura—cūṛṇāny antarikṣāt pravaraṣanti smōpariṣṭhū cāntarikṣe vaihāyasam mahā…… (280)

(妙) 天鼓虚空中自然出_二妙声_一 (44 c)

(正) 上虚空中 自然雷震 柔軟音声 (116 a)

(梵) upariṃ ca vaihāyasu dundubhīyo nīnādayanto madhurā aghaṭṭitāḥ | (282)

前揚三ヶの文は何れもこの章の前半に於てみられる。これは一切の衆生は無上等正覚を得べしと仏が説かれた時、上

の方から世尊、一切衆生の上に曼陀羅華等が降りそゞぎ、天鼓は自然に鳴ったという場面の説示である。

g 常不輕菩薩品

(妙) 是比丘臨欲終時。於虛空中。具聞威音王仏先所説法華經。(51 a)

(正) 大臨終。踊在虛空唱揚大音。欺斯經典(123 a)

(梵) sa ca sadāparibhūto maraṇa — kṛtā — samaye pratyupasthite 'ntarīkṣā — nirghoṣād imam
dharma — paryāyam aśrauṣit (321)

h 如來神力品

(妙) 即時諸天於虛空中。高声唱言。(52 a)

(正) 則聞空中音聲。而歌頌曰。(124 a)

(梵) evaṃ cāntarīkṣād ghaṣam aśrauṣuh — (329)

(妙) 彼諸衆生聞虛空中聲。已(52 a)

(正) 於時衆生聞空中自然之音(124 b)

(梵) te sarva — satvā imam evaṃ — rūpam antarīkṣān nirghaṣam śrutvā (325)

梵文法華經に於ては更に一ヶ所 antarīkṣā の語の使用がみられる。

十方の諸仏の世界に住する一切大衆が、仏の神力の故に、多宝塔の周囲に無量無辺の菩薩衆、四衆等が集つておるのを見、觀喜し未曾有を感じた時に、諸天が上の方から声を發したとする折の記述である。従つて安樂行品の場合と同様に神力品の虚空は諸天の住処であり、antarīkṣā であるといふ。

以上、妙法華經に於てみられる虚空の語について、それが梵文法華に於て *antariksa* の語をもつて語られたものについて見て来たのであるが、こゝで *antariksa* によつて表現しようとしたものを二つの種類に大別出来るように思われる。一は天から雨を降したり、声を出したりする諸天の住処に關するもので、二は多宝塔が地より涌出し空中に住したり、仏が空中で何ごとかを為したりする場合のものである。前者は安樂行品で妙法華經が虚空諸天、正法華經が虚空神明無数天子と訳しているのに対して、梵文法華經は *antariksāvacaṛās* となしておつて妙正阿經の文は「虚空の諸天」「虚空の神明云々」と読むべきことを示している。従つて、主語は諸天であり虚空は諸天を修飾する語であらねばならないので、虚空における諸天はとなされなければならない。即ち、この場面の虚空は諸天等の住処であり、人間世界の上にある空中を意味し、*ākāśa* のもつておる虚空の意味をもつておらない。後者の使用法では説示の内容、回数からも見宝塔品が中心であるといへる。しかし、見宝塔品と涌出品の説法場面とは相異が認められるところであつて、見宝塔品を中心とする *antariksa* 使用の虚空の語は空中となさざるを得ない。尚、この場合の両品の内容上の説明は日本仏教学会年報第二十三号所載の拙論、法華經の見宝塔品と從地涌出品に於ける *antariksa* と *ākāśa* について、を参照していただきたい。

五

ākāśa 使用の場面

この語の使用例は先づ藥草喻品に見られる。即ち

a 藥草喻品

(妙) 所謂解脱相離相滅相。究竟涅槃常寂滅相。終歸於空。(19 c)

(正) 入解脱味志于滅度。度諸末度究竟滅度。令至一土一同法味。到無恐懼使得解脱。(83 c)

(梵) *eka-rasa-dharmam viditva yad uta vimukti-rasam nirvrti-rasam nirvaṇa-paryavasanaṃ nitya-parinirvitan eka-bhūmikam akāśa-gatikam abhimmuktim* (116)

この章の冒頭で世尊が迦葉と大弟子等に如来の法は一相一味なり、と語った後に於て説示された文章である。梵文法華経が *ākāśa-gatikam abhimmuktim* と語っておるのに対し、妙法華経は「空」の語を使用しているのに、正法華経は「空」とも「虚空」ともなさず、恐懼なく解脱を得せしむるに至るとなしているのは注意を要しなければならぬ。

b 化城喻品

(妙) 南方二仏。一名虚空住。二名常滅。(25 b)

(正) 南方現在二仏。号一住常滅度如来。(92 a)

(梵) *dakṣiṇasyaṃ diśi bhiksava ākāśa-pratīṣṭhitaś ca nāma tathagato 'raṇ samyak-sambuddho...*
∴ (164)

世尊が十六人の菩薩の住処について語った場面であるが、南方に二仏ありとなし、二仏の名称を迷っておるが、正法華経は常滅如来だけで、*ākāśa-pratīṣṭhitas* (虚空住) 如来の名称を訳出しておらない。その理由は勿論不明である。

c 五百弟子授記品

(妙) 七宝台觀充_三滿其中_一。諸天宮殿近_三処_二虚空_一。天人交接_三得_二相見_一。(27 c)

(正) 重閣精舍周_三邊普滿_一。而用七宝。猶如諸天宮殿麗妙遙_三相瞻見_一。天上觀世間。世間得見天上。天人世人往_三來交接_一。

(95 c)

(梵)*dava-vinānāni c' akāśa-sīhīnāni bhaviṣyanti devā api manuṣyān drakṣyanti manuṣyā api devān drakṣyanti* (178)

富樓那が法明如来とならんとする記別の中にこの文章は見られる。法明如来の住処は平らかにして七宝をもってなり立ち、七宝をもった楼閣は充滿し、且つ諸天の宮殿は虚空にあるとなしているのであるが、正法華経には虚空の直訳は見られない。即ち麗妙遙相瞻見は意識と云わなければならない。

d 見宝塔品

(妙) 假使有_レ人 手把_三虚空_一 而以遊行 亦未_レ為_レ難 (34 a)

(正) 若以一手捲 捉_三尽於虚空_一 至於無所至 不足以為難 (104 c)

(梵) *ākāśa-dhātum yah sarvām eka-muṣṭim tu niksipet* —

prakṣipitva ca gaucheta na tad bhavati duṣkaram (118)

法華経を受持することの困難について語られたものであり、虚空をもって一個の物質視した比喩である。正法華経はこの文章に至って初めて *ākāśa* を虚空と訳出しておる。

e 安樂行品

(妙) 一切法空。如_三実相_一。不_レ顛倒_二不_レ動_一不_レ退_一不_レ転。如_三虚空_二無_三所有性_一。(37 b)

(正) 欲一切法皆為空無。如所住立已墮顛倒。所立正諦常住如法。專乘身心不動不搖。不退不轉躡捨滅盡。不生不有無有自然。無為無數無所可有。(107c)

(梵) *sarva—dharmaṇā śūnyān vyavalokayati yathavat pratiṣṭhītaṁ dharmaṁ aviparīta—sthāyino yathā*
—*bhūta—sthītaṁ acalān akampyān avivartyān aparivartān sadā yathā—bhūta—sthītaṁ ākāśa—*
svabhāvān (2324)

四安樂行の中の身安樂行につき説かれたもので、第二の親近処の冒頭に説示された一節である。正法華経が *ākāśa* の訳出を行なっておらない点はやはり注意を要すると思われる。しかし、何れにしろ、虚空が空 *śūnyata* の如く所有の性なきことを示している。

f 從地涌出品

この章に於ては四ヶ所において *ākāśa* の語は使用されている。その主なものは

(妙) 光尽在_ニ此娑婆世界之下。此界虚空中住。是諸菩薩聞_ニ釈迦牟尼仏所説音声_ニ從_レ下發來(40a)

(正) 在於地下撰護土界。人民道行倚斯忍界。聞仏顛揚法華音声從地踊出(110b)

(梵) *ye'svām mahā—pṛthivyām adha ākāśa—dhātāu viharanti sma* (2153)

(妙) 爾時四衆亦以_ニ仏神力_ニ故、見_ニ諸菩薩遍_ニ滿無量百千万億国土虚空_ニ(40a)

(正) 令四部衆悉得普見。又使念知比忍世界。諸菩薩衆於虚空中。各々撰護百千仏土(110c)

(梵) *imāṁ ca Saḥaṁ loka—dhātūn śata—sahasr'ākāśa—parigṛhītān bodhisattva—paripūrṇān*
adrākṣuḥ (2159)

大地の底の虚空から無量の菩薩等が涌出し多宝塔の前に至り虚空の中に住した、となす一連の記述の文章であるが、正法華経はこの章に到り初めて新たに *ākāśa* に撰護土界の訳語を使用している。尚、撰護土界の訳はこの章にか見られなく。

g 分別功德品

(妙) 如_二虚空無辺_一 雨_二天曼陀羅華……_一 (44 c)

(正) 譬如虚空 無有辺際 諸天所雨…… (116 a)

(梵) *anantakaṃ yusya pramāṇu nāsti*

ākāśa—dhātū ca yathā 'prameyaḥ (288)

(妙) 譬如_二虚空東西南北四維上下無量無辺_一 (45 c)

(梵) *api nāmAjit ākāśa—dhātur aparyantaḥ pūrva—dakṣiṇa—paścimottarārdharōrdhvaṣu dikṣu vidikṣv*

(288)

(妙) 如_二虚空無辺_一 其福亦如_レ是 (46 a)

(正) 譬如虚空界 其限不可得 (117 c)

(梵) *yathārv' ākāśa—dhātau hi pramaṇaṃ nōpalabhyate |*

disāsu dasāsu nityaṃ puṇya—skanado 'yam idī' sah || (260)

この章に於ける虚空は、如来寿命品の説示に対し弥勒菩薩が世尊の説示は衆生を利すること無限であると語る箇所と世尊が衆生に向つて、如来の滅後に法華経を受持し行ぜば、その功德は虚空が周圍に無限なるごとく無量であると説

示する記述に於て見られる。正法華經のこの章に於ては *akasa* を虚空と翻譯しているけれども、虚空が周圍無限なるを語る所では *akasa* の訳語は見あたらない。

六

以上、妙法華經に於て虚空と語られた部分について、梵文法華經が *akasa* と記している箇所を摘出して来たのであるが、此処では *antarika* の場合と異つて、妙正兩法華經に於て顯著な相違を見出すことが出来る。

即ち、*antarika* の訳語としては妙正兩法華經ともに「虚空」の訳語を使用しているのに比較して、*akasa* の訳語の時妙法華經は一樣に「虚空」の訳語を使用しておるけれども、正法華經は少かに三度「虚空」の訳語を使用しておるにすぎず、他は「撰護土界」と訳すか、使用された文章の義によって達意的に訳出するか、或は翻譯を省略するかの何れかであると云いうる。

即ち、此処でこの区別を明記すると左の通りである。

A 撰護土界 涌出品

B 虚空 見宝塔品・分別功德品

C その他 藥草喻品・化城喻品・五百弟子授記品・安樂行品・分別功德品

この中、「その他」の項目には達意的翻譯と省略との両者を含ませたものであるけれども、妙法華經に存し正法華經に存しない省略は化城喻品と分別功德品の中の一ヶ処とに見出される。前者は菩薩の名称を省略したものであり、後者では同一内容の説示が三度続けられる中の一ヶ所である。或は繁雜をさける意味の省略かもしれないけれども、理由は不明であるといわざるを得ない。而して、*akasa* の存する文章箇処の内容は梵・漢法華經共に、*akasa* が廣大無

辺にして障礙なきものたるを説示せんとする場面に於て使用されておるのであるか、*akasa*が*śūnyata*と同様内容を示すものとして使用されておるのであるが、これに対し、涌出品の場合は明らかに*akasa*を仏の住まうべき処として特殊な意味で使用している。即ち、正法華經に於て撰護土界と訳出されておる箇所には形容詞的要素は認められない。これらの点から次の事柄が考えられる、竺法護は法華經を翻譯するの際して、*antariksa*と*akasa*の二つの語の間にある程度の区別を立てたのではなからうか、という点と、涌出品の場面を他の各章とは区別したのではなからうという点である。

七

如上の点を明確にするには、仏教以前の印度思想に於て、*akasa*を如何様に理解しておったかをしらべなければならぬ。虚空*akasa*という語は元來空中*antariksa*の小なるものとして、物体の運動出來得る空間として考えられ、更に、その空間が廣大無辺にして障礙なきものとして思考されるようになり、この点で物質視され得る空中とは相異せる概念の面が発達して來たと思われるが、更に、ヤージニヤヴルキヤヤ *Yajurvedikyā* は一切の世界の中で最高に優れている梵界の外面的なものを*akasa*となしておるから、*akasa*は天上地下にも存して天地三世一切のものを包括し凡てのものに生成存在活動の場所を与うるものであって、それは *antariksa*の意味する拡がりとは差異ある内容を持たされて來たというる。この三世をも包括すると考えられた*akasa*は、チャイナJainaに於ては*akasa*を除く四実在体*astikāya*の存在成立活動の場所としての大空処であり、*akasa*は唯一無限常住無作である、と考えられ、かくて初期に於て *antariksa*の小なるものと考えられておった*akasa*は成生發展して、二つの意味に分けて考えられるようになった。一つは六界中の空界とし、実有として使用されるものであり、他はかゝる性質を超越したものである

即ち、有部の大毘婆娑論は *ākāśa* を明白に二分して考える立場をとっている。それは *ākāśa* *ākāśa dhātu* とに關してであるが、同書七五に、虚空空界有^二何差別^一。答、虚空非^レ色 空界是色。虚空無見 空界有見。虚空無對 空界有對。虚空無漏 空界有漏。虚空無為 空界有為。と示す如く、*ākāśa* を二種の意味に使いわけているのであるが、この時虚空は無為法であり空界は有為法中の色法として取り扱われていることは明白である。しかるに、この説一切有部 *Sarvāstivādin* に対して、經量部 *Sautrāntika* の立場で有部を批判したといわれる俱舍論は、色法のうちの四大と心の実有を説き、その他の各法及び無為法の実有なることを否認して、六大中の空界は色法に非ざることを説示している。^⑦この面で、經量部から發展生成したとなされる詞梨跋摩 *Harivarman* の成実論が、諸法を分類して五位八十四法を立てているけれども、それは俗諦上のことで仮りに設けたものであり、本来の第一義諦からみれば空である、となしているごとく、(註成実論第13虚空は無法に底附く。但色なき所を名づけて虚空となせばなり)一切のものが空であり実有ではないとする考えに發展して行った訳である。^⑧然し、反面、俱舍論に反對の立場を示して衆賢 *Saṃghabhadra* は阿毘達磨順正理論・阿毘達磨頌宗論を著して、虚空と空界とは別に存するものにして、空界の体は実有なることを強調している。即ち、順正理論第二に於て、以虚空界与虚空相少分相。故有此処仮号虚空。空界即是咽喉等穴。^⑨と説き、更に、俱舍論に反論して次の如く述べている。

虚空界者。不離虚空。然彼虚空体非実有。故虚空界体亦非実。此有嘘言而无実義。虚空実有。後当広明。令因空界。且略成立。離虚空界实有虚空。故世尊言。虚空無色無見無對。当何所以。然藉光明虚空顯了。比經意說。虚空無為。雖無所依。而有所作。^⑩として虚空も存在せるものなるを主張している。頌宗卷第三には、顯色差別名爲空界。応知此界作是実有。説内外故。如地界等此離虚空其体別有。となしている。^⑪

而して、この虚空は虚空界とは相異なるものであるが故に、六大中の虚空ではないことも明確に示されておるところである。かく、空界と虚空との相異せることを明白に示して、六大として扱われる空界は実有にして虚空と相異せることを説示している。これは即ち、虚空を *ākāśa* と *ākāśa dhātu* とに分類し、前者は無為法における虚空無為の虚空後者は六大中の虚空界として、この二つが同一内容のものであるか、否かに関する論議であるように思われる。そして、かゝる論議の結末は明白ではないけれども、この間に中観派・唯才派や大乘仏教が成立し、それぞれの立場で虚空に就ての説示も展開せられておるのである。即ち、

以上の仏教各派に対して龍樹 *Nāgārjuna* 阿利耶提婆 *Āryadeva* は、より優れた立場から虚空に対する態度を示している。即ち、中論観六種品に

空相示有時 則無為空法

若先有虚空 郡為是無相^⑫

na—ākāśani vidyate kinicit

pūrvam ākāśa—lakṣaṇāt |

alaksanain prasajyeta

syāt pūrvam yadi lakṣaṇāt ||

と、虚空が全く実体のないことを説き、かゝる実体のない物は何処の場処にてもあるはずはないので虚空は有体でもなく、非有でもなく所相でもなく相でもない。と示して、一切の物はかくの如くでありこれを有・無と見るものは真実実相の義たる空を見ることが出来ないであろうとしている。而して、彼の高弟提婆は百論に於て、無色が虚空の相

ではなくして、虚空は無相にして、但だ名のみ有つて実のなきものであると、虚空が全く実体を有せざるが如く一切の存在は全て実体を有しないものであることを説示している。¹³これは、従前の概念を実体視しこれを分析研討する態度を根底から否定するものであり、仏教の根本理念たる空 *śūnya* の思想性からの現象界の再認才の立場であるといいうる。従つて、この二者の態度は虚空が如何なる性質を有するものであるかを究めるための資料とはなり得ないといいうる。

以上の如く、各論述書を見たところ、虚空の訳語は *ākāśa* につけられたものであつて、*antarikṣa* の訳語ではないことを知りうるのであるが、たゞ有為法として考えられた六大中の *ākāśa dhātu* には *antarikṣa* に通じうる要素が含まれているようにも思われる。何故なら、それは現実には見ることは出来なくても、青空として空中を考える時、可能的対象となり得べき要素を持つように思われるからである。

これに対して、中国に伝来された大乘仏教は、そこで華々しい開花を見るに至つたのであるが、これ等の大乘の花弁の中に虚空 *ākāśa* についての説示を求めると、慧遠の大乘義章第二、吉祥の百論疏卷下の中に於て認めることが出来る。即ち、大乘義章第二には、虚と空とは無の別称なり。虚にして形質なく、空にして礙有ること無きが故に虚空という。と示し、更に、従来、小乗徒に於てなされた虚空に対する前記の二分法に就て、虚空界を有為法として六大中の空大の所摂とする考え方を、成実・大乘は彼の有為の虚空を破し但だ一種の無為の虚空を説く。とこれを否定し、虚空は無為法だけであることを示して、この無為法の虚空については、空を見るといふも而も実には見ざるなり。若し空可見ならば即ち是色法にて色は即ち無常なり。(北本) 涅槃經に広く破して空の見匡きことを明せり。虚空是の如し。と、虚空が無相にして実のなきものであることの説示を展開している。¹⁴而して、嘉疏の百論疏下の中も亦、虚

空は実有でないことを体用相の三面から示したものである。^⑬ かくの如く、虚空 *akāśa* が無自性にして実のなきものであり、擧げどころのないものであり、虚空と虚空界の区別はなく一様に無為の虚空である、と大乘仏教が説示するとき、大乘の考える虚空はもはや空中 *antariksa* のもつ意味とは隔別の内容のものであると云わなければならぬ。即ち、かゝる意味合に於ては、虚空は理念的空間であり、象徴的空間であり、絶対空間とでも稱すべきものと理解されているといふ。⑭ *Keri* が英訳法華經に於て *akāśa* 之 *element* と訳して *antariksa* の *sky* の訳語とたがえているのはかゝる理由によると思われる。

八

無相にして実体がないとせられる虚空 *akāśa* はいわば絶対空間を意味しなければならぬ、と思われる。従つて、それは何物にも障礙されることなく、廣大無辺、一切の物をその中に含ましめている空間であり、法華經に見られる大多数の例はかゝる立場からなされたものである。法華經が妙・正両經を通じて *akāśa* を虚空と訳出したのはこの意味で当然であるといわなければならぬ。而して、藥草喻品と安樂行品は *akāśa* をもつて *sunna* の意味に於て使用していることは否定出来ない。即ち、妙法華經藥草喻品は *akāśa*—*gatikam* *abhimuktim* を終に空に帰すと訳出し、正法華經は、直訳は見出せないが、文末を解脱を得せしむと訳出しているのであるが、この *akāśa*—*gatikam* が *nirvāṇa*・*nitya*・*eka*—*bhūmikam* 等に並べて使用されておる処をみると *akāśa* がこれ等と同類の同容を示すものとして使用されたと思われるので、空と同義語に使われたと思われる。安樂行品は一切法は空にして虚空の如く所有の性なし、とするものであつて、前者同様に空と同様内容をもつものとして考えられておつたものであろう。尚、こうした

使用例は法華經に限ったものではなく、古く阿含經の中に於ても、空處・空想・空林等の用語例にも見ることが出来る。即ち、虚空が無自性として考えられる立場が、空・śūnyaに親近する結果となって来たものと思われるのである。併し、他方漢訳法華經に於て *antariksa* を虚空として訳出したのは初期印度思想に於て *ākāśa* を *antariksa* の小なるものとして考えた方法の影響であると思われるが、*antariksa* を空界と考えその空界が六大中の虚空界と混同して考えられた結果ではなからうか。障礙なく廣大無辺なるものは虚空にとゞまらず空中も亦かゝる性質を有するものである故に、虚空と空中とは混同し易き性を有していると思われる。漢訳兩經が *ākāśa* と *antariksa* の兩語を通じて虚空と訳出したのはこの辺に理由があるのではなからうか。そしてこれ等のうち文義上に於て、*ākāśa* が *śūnya* に親近していると思われる箇處に於ては前記の如く、正法華經は「虚空」の訳出語を使用せず意訳をなしたと考えられる。

換言すると、羅什は妙法華經の翻譯に際して *ākāśa* と *antariksa* の兩語に於ての差異を別段に考えなかつたと思われる。これに対して、法護は廣大無辺な抔りをもつものを虚空となして *antariksa* と同様と考えた様子であり、*ākāśa* のうちに *śūnya* に以通う意味のあることを探知して、これには直訳をあたえなかつたと思われる。何故ならば、虚空の語は既に廣大無辺な抔りに対して名附けたからであり、これと空とは異質の内容をもつ詞だからである。そして *ākāśa* が法華經説法展開上重要と認められた涌出品に於ては特別に撰護土界の訳語を与えたといいうる。

九

涌出品に於て正法華經が *ākāśa* に特別な訳語を使用している、と思われるのは、単に表現された訳語が相異しているということではなくって、涌出品の内容が法華經を理解する上に極めて重要だからである。更に換言すると、涌出品に於ける *ākāśa* が如何なるものであるか、或は宝塔品の *antariksa* と如何に相異せるものであるかによって、法華

經の特異性が表現されるか否かの問題を含むと思われるからである。法華經の後半が如来の生命の永遠性について語られたものであり、本仏が時間と空間とを超越したところに於て確立されていることは極めて多数の人々によって指適されているところである。そして、時間の超越は地涌の菩薩出現に於てなされたとせられているが、これと共に空間の超越も地涌の菩薩出現に依つてなさなければならぬ。即ち、地涌の菩薩の住処は一切の自性・固定有の實在を否認することを意味しなければならぬが、地涌の菩薩の住処について道生は下方空中住者在空理也、と註して *śūdra* に住すものであることを示しているが、見宝塔品に來集した四衆等がこの地涌の菩薩等を見ることが出来なかつたのは、悟性非十住所見故であるとしている。かくの如く、地涌の菩薩の住処 *akāśa* が *śūdra* であることは、後の註訳書たる文句・玄贊等にも見られるところである。即ち、地涌の菩薩の住処 *akāśa* について、文句は非レ比非レ彼して中道に存するとなし、玄贊は証ニ真性ニ而得ニ一乘ニ、故住レ空となしているが、かゝる虚空が單なる空中を意味するものでなく思想的空間であり、*element* であることは明白である。そして、この虚空は地涌の菩薩の住処である限り、地涌の菩薩出現と時を同じうして設定せられたものであるといふ。即ち、本仏の生命の永遠性を説示する意欲は空間を現実的空間から超越させることと共に始められるべきものである。仏陀の久遠の生命觀は仏陀の生命が、空絶對無に媒介された時間であり、現象的生命から思想的空間に轉換せられたことを意味すると思われるが、これと同様に、仏陀の存在の場処は現象的空間から思想的空間に轉換せられているのが法華經の構成であるといふ。それは単に耆闍崛山から虚空へと說法場面を移したとする從來の見解を意味するものではなく、虚空會の說法場面と考えられるものの中に、実は *antrikṣa* の說法場面と *akāśa* の說法場面の両者が存することを認めるべきであると考えられる。即ち、この小論に於て述べ得ることは、見宝塔品の說法場面は現象的空間であり、涌出品からの說法場面は

思想的空間であり sutra に媒介せられるものである、とする点に関してある。布施博士の指適せる靈界が鷲峰を軸として顕現する、となすのもかゝる点を意味すると思われる。

—— 完 ——

註

- ① 日本仏教学界年報第二十三号、拙論法華經の見本品と從地涌出品に於ける ananti śāyakaśa について 参照
- ② 妙は妙法華經を意味します。所依本は大正藏經、VOL 9、P 12 a
- ③ 正は正法華經を意味します。全 P 75 a
- ④ 梵は梵文法華經を意味します。荻原・土田 本 P 67
- ⑤ この箇所における正法華經の相当部分は明白に見極められない。
- ⑥ 大正 VOL 27・P 388 c
- ⑦ 全 P 29・P 6 c・P 34 a
- ⑧ 全 P 32・P 343~345・169 章・170 章参照
- ⑨ 全 P 29・P 336 a
- ⑩ 全 P 347 b
- ⑪ 全 P 787 a
- ⑫ 全 P 30・P 7 b
- ⑬ 全 P 179~182・方 9・16 章参照
- ⑭ 全 P 44・P 496 c・497 a
- ⑮ 全 P 42・P 295 c~6 a
- ⑯ 虚空が単に広大無辺な拡がりを意味するだけのものではないことは、紀野一義著 法華經とチャインドーギア・ウ・パニシヤツドに記されている。即ち、人間の心臓の中に虚空の存在をみると、その小さき虚空の拡がり人間の外なる宇宙的な虚空の拡がりとは相応するものである。即ち、それは象徴的空間を意味すると。
- ⑰ 大崎学報 第一〇九号 布施博士著「靈鷲山」の語義参照。此の著は青龍峴山と靈鷲山とは同語の翻譯であるが、その中靈鷲山は意識であり、壽量品に見られることを示さんとしたものである。